

創立40周年に当って

部長 平 良

わたくしが部長になったのは昭和40年秋であり、部はリーグ戦一部から二部になり、早慶戦も連敗をはじめた頃である。その後30周年をへて現在までかなり長い間部長をつづけて来ている。その間にそれなりに成果を収めた時期もあったが、強化された他大学には力足らずに通して来ているように思う。

慶応義塾のバドミントンの歴史は、まさに日本のバドミントンの歴史と同じであり、塾のバドミントン部が現在国際的にも高く評価される日本バドミントンの発展への貴重な土台を築き上げたことはたしかである。もとより土台を築いた者がいつまでも栄光の座にとどまることが許されているわけではないが、わたくし達は40年の歴史を顧ることから、わたくし達の果さなければならぬ役割を思い出す必要がある。

もとより、健全な学業とスポーツを両立させることはかなりの努力を必要とするものである。しかしながら学生としてスポーツをする以上それを両立させるために克己心をもって努力をしなければならぬ。

バドミントンにも賞金制度が導入されて、プロ化の状況が現れている。これによってプロ・プレイヤーの道が拓くとそれが逆に正常であるべき学生スポーツをゆがめる影響をもたらすかもしれない。すでに野球にはそれが典型的に表れて来ているのである。そうした場合に、塾のバドミントン部はあるいはかつて見られた栄光を回復することはむづかしくなるかもしれないが、すくなくともアマチュア・スポーツの最高峰を旨として努力することは出来るだろう。

次の50周年にはわたくしは部長を離れていることになるはずであるが、その年が今年を越えた栄光の年であるようにこれからの10年間の努力を期待している。

草創期の思い出

初代部長 寺 尾 琢 磨

創立40周年と聞かされて、今更ながら「時は過ぎゆく」の感に打たれるばかり。何か書けとのことなので、喜んでお受けしてはみたものの、記憶は薄らぎ資料も散逸して、容易にまとまらない。粗末とのお叱りは覚悟の上、敢えて記憶の糸を辿ってみよう。

部が発足した昭和17年は戦争勃発の直後で、まだ戦捷気分酔っていた時である。バドミントンという新しいスポーツにとりつかれた数名の塾生が「バドミントン倶楽部」なるものを結成し、弥次馬根性旺盛な私を部長に担ぎ出したらしい。この競技は他校にはまだ伝わっていなかったもので、横浜のYMCAあたりと練習や試合をしていたようである。だが戦局は日々悪化、部員も私も

勤労働員で農村や工場で汗を流す毎日となって、部活動など完全に吹っ飛んでしまった。

日記をひっくり返してみても、昭和18年4月17日「部員5名来訪、報国隊といかなる関係に立つべきかを協議した」とあるだけである。唯だ今でも目に残っているのは、戦末期の或る日、小泉塾長と奥井さんを西門ワキの幼稚舎校庭に誘い出し、部員の指導で練習の真似事をやったことで、さすが昔テニス選手として鳴らした小泉先生は部員に誉められて喜色満面、そのときの無邪気な笑顔は今でも忘られない。先生が空襲で無惨な姿に変られたのは、それから間もなくのことだった。

やがて戦争は終わったが、半ば廃墟と化した塾の復興は困難を極めた。部も再建にのり出し、幸いいくつかの大学にいつの間にかバドミントン部が生れていたのも、確か昭和22年だったと思うが、法政、明治、立教と相談して、「関東大学バドミントン連盟」なるものを結成し、会長には私が祭り上げられ、塾の部長には奥井さんが就任して下すった。連盟は毎年春秋2回のリーグ戦を行ったが、さすが元祖の塾は抜群の強さで、まるで試合にならなかった。会場探しは苦勞の種で、焼け残った体育館を求めて都内を転々したものである。だが私の覚えているのは幼稚舎と佐久間小学校の二つだけで、そのほかは思い浮ばない。女子部員の現われたのがいつだったかも思い出せないが、昭和37年の創立記念の席で私が「女子部員がタッター一人では情けない」と嘆いたところを見ると、長いこと女子学生にはあまり魅力的ではなかったようである。

やがて私は身辺頓に多忙となり、部からおいとまを頂き、昭和44年には、定年で住み慣れた三田の山ともお別れした。以来13年、いつしか83歳の老爺に化してしまった。子供がないので、さぞ淋しかろうと同情されるが、結構楽しみはあるもので、ことに私の場合は、いろいろのスポーツと関係したので、そのテレビ放映がとても楽しい。考えてみると私ほどいろいろの部に首を突込んだ人間も少いようでこの部のほか、スケート、自動車、スキーの各部長を勤めたばかりか、最後には応援指導部長まで兼ねたので、大抵のスポーツに親しんだわけで、その中には自分では全くやらなかったスポーツは必ずしも自分がやるだけが能でないことを痛感している。

40周年を迎えるに当たって、私は部の今後の一層の発展を祈ると共に、創立当時の部員の苦勞と、常に暖かく援助して下すった奥井さんや体育専門の兵藤君の厚意に対して、改めて感謝の意を表したい。

バドミントン部創部40周年を迎えて

副部長 森 谷 雅 美

高校のバドミントン部は新制高校として発足した翌年、昭和24年に体育クラブとして活動を始め現在まで33年着実にその歴史を刻んできた。他のクラブと同様、それ以上に物心両面にわたって大学クラブとの連結は強く体育クラブとして好ましい活動を続けている。ここに創部40周年をむかえて、先輩の努力、援助に感謝するとともに将来に向かって後輩のたゆまぬ精進を期待する。

一つのスポーツに高校、大学と7年間（普通部時代も入れれば10年間）専心できる環境にあると

いうことは、慶応義塾ならではのことであり、義塾の伝統を育んできた底流の一つであると確信する。高校の部長として特記するような寄与することなかったが、部活動とは、先輩から後輩へ技術の伝達、又それ以外の部活動を通しての人間関係、一生続くような先輩、同輩との交遊等監督、コーチ、部員が、自主的に行うものであると確信するもので、この面においても我が部は理想的に運営されてきている。特に大学の部からのコーチ、OBの現役に対する面倒には感謝している。

最近、高校内でただ先輩であると理由だけで、何の面識もない一年生に暴力をふるうという事件があった。高校は規模が大きい。大きい故にさまざまな人間と出会うことができる。気の合う人間気の合わない人間、一般の社会と同じ様な人間関係を経験できる場である。先輩は後輩に心から尊敬される先輩であってほしいし又、後輩は何も考えずに先輩の言にはただ盲従することないように期待する。人間関係や利害関係がないと口のきき方が粗末になるということも気になることで、ぜひクラブ活動を通して、真の紳士に成長してほしい。

時に成績の問題で部活動が続けられないという部員に出会うことがあるが、では部活動をやめればその分だけ学業に精が出るという訳でもないのであるから、授業中には、集中して講義を聞く。これだけでも実行できれば十分バドミントンを続けられると思う。

このお祝いの文を書くにあたって、高校30年史を開いて見ると、初代の小松光義（美術）、故川上宏一郎（国語）、奥野泰雄（国語）各部長の名前が記されている。50年、100年と続いて行く歴史の中で背後から見守っていられる先輩の暖かい眼差しを感じ心暖まる思いがする。

高校、大学と結びついた体育会バドミントン部の創部40周年を心から祝うものである。

4月30日

私とバドミントン

慶応義塾女子高等学校バドミントン部部长

武 永 茂 里 江

年を追って過去の記憶が曖昧になって行くが、私が野口福次先生（現志木高の主事）からバドミントン部の部長を引き継いだのは、多分、昭和32年の秋ではなかったかと思う。その当時は、慶応女子高は3年はA、Bの二クラス、2年、1年がA、B、Cの三クラスとなっていたので、生徒数は全校で450名弱、専任教員も現在と比べるとずっと少なく、12名であったと思う。しかし、クラブは結構多くて、文連、体連を合わせて23ぐらいあった。

さて、33年の夏合宿から、私はバドミントン部と行動を共にした。この年は会津若松市の体育館を借りて、宿泊はそれの付属施設の木造二階建の建物であった。一階には食堂、炊事場、洗濯場、浴室等があり、二階に五部屋の宿泊室があって、男子高生25名、女子高生12名ぐらいの提携クラブの合宿であった。家には10ヶ月の長男がいたので、留守番の都合があって、生徒より半日遅れて早朝会津若松駅へ到着した。きょろきょろして汽車を降りると、向うから「先生、！」といい乍らコーチが走ってきて重い荷物も持ってくれるし、本当に嬉しかった。バスに乗ったりしてやっと宿舎へやって来

ると、どろどろと大きい音を立てて階段を大勢の男子高生がかけ下りて来て、私を出迎えてくれた。「あれあれ、私は女子高の先生なのに……」とびっくりして見上げていると、やがて、ねむそうな顔をした女子高生がそろりそろりとその後から顔を見せた。やれやれ一安心と思ったが、それからの合宿生活を通して、一般に、男子高生の方が私を歓待してくれるし、朝の挨拶も大きい声で気持よくするし、「先生、先生。」と何かと気をつかってくれるので、少々おかしかった。

体育館は道路のはす向いであって、大きな新しい体育館であった。森友徳兵衛さんが商用を兼ねて来て下さっていたが、私に「先生、体育館が暑くて本当に申し訳ないとは思いますが、時間の許す限り体育館で練習を見てやって下さい。観客が居ると居ないとで、生徒の意気込みが大変違ってきますから……」。とおっしゃった。なるほどそういうものかとしろうとの私はそのお言葉を心に深くとどめたわけである。折角、乳飲児を置いて来たわけだから、私も出来るだけ良い引卒者として勤めなくてはと、毎日毎日体育館へ通った。そうして、生徒達の練習を見ていると、体操着もショーツもパンツも汗びしょりになって、倒れそうになりながら、それでも自分で自分に声を掛けて立ち上っていく人、パーンと快い音がして力強くクリヤーが飛び、頬の輝いている女子高生等、よく見れば見る程生徒との一体感が強くなって、時々目頭が熱くなってくることもあった。宿舎へ帰ると男子高生は、先輩のシャツを手押しポンプの所で洗っていたり、夜は大きい部屋に布団を敷きつめて、大きな蚊帳を吊って寝るのだが、怪談をねだられて、少し声色を使って話してやったり、なかなか楽しい合宿であった。翌年の日光の合宿へは、長男をつれて行き、体育館の横手の崖の上から下の谷へ向って小石を投げ合って子供と遊んだりした。夜は旅館の庭で花火をしたり、ミーティングではすぐ子供が退屈して逃げ出すので困ったが、心やさしい人達も居て、つれて遊んでくれたりもした。

箱根仙石原の甲子園で合宿するようになってからは、良い環境で親身になってお世話をして下さるので、安心して過ごすことが出来た。この頃から男子高と手を切って、女子高単独のクラブ活動となり、私は長男と長女をつれて参加した。東京からも近いので、入れ替わり立ち替わりOB、OGの方達、そして兵藤先生もおいで下さって、熱心にご指導下さった。

いつも思うことだが、女子高バドミントン部はこの慶応の中にあることで、どれだけ大きい恩恵を受けていることだろうか。女子高生は高校へ入学して始めてバドミントンをする人が殆んどで、全く初めは下手であるが、コーチの一生懸命な指導と、OBの方達の気持のよい応援のお蔭でぐんぐん上達していく。合宿では、女子高生の熱心さ、素直さに感動して、来てよかったと言って下さるので、私はただただ頭の下がる思いで一杯である。

こうして今年は創部40周年を迎えることが出来て、本当に様々な思い出が頭の中を去来している。そうして、これからのバドミントン部がどんな発展を遂げるだろうかと思うとき、この大切な一時をみんながそれぞれに目を閉じて、今何をなすべきかを考えて欲しいと思う。私は、自分に来ることは、やはり、ラケットを握らなくても、体育館へ行って、一人一人のしていることをよくよく見ること、これが一番のような気がしている。

(1982・4・23記)

創立40周年にあたって

三田バドミントンクラブ会長

小 官 淳 宏

慶応義塾バドミントン部が創立40周年を迎えたことを心から喜ぶものであります。またこれを記念してささやかな催しを行うにあたり多くの方々から御祝辞を頂き感謝に堪えない次第でございます。

戦中戦後にわたるこの私共の歴史を振り返ってみますと、スポーツの一つであるバドミントン競技も社会の在り方と深く関わっていることを実感致します。食糧不足の時、用具の不足の時、就職難の時、高度成長の時、社会不安の時等様々な時期を経験致しました。そうして、その時代、時代にあたった方々が懸命に責任を果して下さった積み重ねが、私共の歴史となって居るのであります。

40年経過した今、私共はあらためてこの競技の理解を深め、力を強め、より栄光ある伝統を築くための道標としたいと念願致します。

創部40周年にあたって

監 督 鈴 木 英 夫

月日が立つのは早いもので、私が卒業してから11年、本年をもって我がバドミントン部は40周年を迎えることになりました。

残念ながら2部という厳しい状況の中にありますが、現役部員一人一人は、バドミントンを通じて、学生時代を意義あるものにしようと頑張っております。確かにかつての黄金時代を取り戻すには、個々の技量という面において、相当の努力が必要でありましょう。現在は科学的トレーニングということが言われており、方法論は昔とかなり変わってきておりますが、バドミントン本来のあるべき姿は変わっていません。シャトルを一生懸命おいかけた頃というものは青春のすばらしい一頁として心の中に残るものです。友と語り合い、又時にはけんかをして論ずるも体育会にいるからこそできるのです。

大島先輩のあとを受継ぎ現在監督として4年目を迎えますが、私を含めた全部員の念願である、早慶戦勝利、一部復帰を、昭和57年のバドミントン部最大目標として練習を重ねるつもりです。勝つためにはどのような事をすべきかという点を考えて実行するかが最も大切な事でありましょう。

最後に、現在まで温かくご支援いただいた塾体育会をはじめバドミントン関係者の皆様には厚く御礼申し上げますと共に今後ともより一層のご指導をお願いする次第です。 (4月29日記)

主 将 渡 辺 俊 二

我が部は、今年で創部周40年を迎えるわけですが、考えてみれば、日本中のどの大学もやってなかった競技を一早く持ち込みクラブとして発足させられた初期OBの方々のパイオニア精神には、尊敬のいたりです。活動以来40年を経た今日の体育会バドミントン部をあずかる身として、現状を申し上げますと残念ながら、黄金時代の様にはいかないのが本音です。関東大学リーグ戦においても、ここ6季2部に低迷してきました。名門慶応義塾大学の入試難がそのまま、質の低下へと向いつつあります。しかし、それを認めるわけにはまいりません。認めてしまえば、我々はそこで既に限界をつくってしまうのだから。我々の目標はあくまでも1部優勝でありインカレ優勝でなくては。40周年を境に部員一同、心を新たに戦ってゆく所存です。

さて、質の低下と言いながらも、練習量では、上位校に負けない我々は、練習の甲斐あってか、実力も一部校に匹敵する程になり、一部返り咲き、インカレ上位進出も手の内にきていると言っても過言ではないと確信しております。この40年の歴史に胸を張れる記録を必ずや打ち立ててみせようと思っております。

古き良き時代は、もう既に化石となってしまった我が部にあるものは、現役の手で新たな戦績をつくることしかありません。立派な戦績をつくってこそ、40年の重みをしょって立つ資格があると思っております。

諸先輩方々、今後もあらゆる方面で御指導をお願い致します。私も、卒業後は積極的にOBの一員として活動してゆくつもりです。我が部の繁栄の為に。



愛の風…
いま青山。

結婚式場

ご宴会場

青山 ダイヤモンド・ホール

☎(03)406-3261 ●地下鉄(銀座線・千代田線・半蔵門線)表参道1分
●駐車場完備 〒107 東京都港区北青山3-6-8

